

蛙公卿

(かわずくぎょう)

ヨコテ

小吉は逃げた。

駆けて駆けまくった。

恐ろしくてならなかった。

戦で活躍し、足軽に取り立ててもらおうと思っていたが、戦はあまりに悲惨だった。そこここで兵士が斬られ、突かれ、射抜かれている。あっという間に目の前は死骸の山となった。

追ってくる敵から逃れるため、小吉は山中を駆け下った。小石に足を痛めながら、下草に転びそうになりながらも必死に駆けた。足は速いほうではないが、それでも山中の木々に身を隠しているうちに、逃げ切れそうだと思った。だが、それはつかの間の安堵でしかなかった。

気がつくやうに道の先がなかった。崖になっていて下を川が流れている。流れは速く、浅くもなさそうだった。いくつもの大きな岩が何物をも砕くように、凶暴な水しぶきを上げている。

物音に、小吉は振り返った。離れたはずの敵兵が刀を掲げ、迫ってきている。敵兵と戦うか、それとも崖から飛び降りるか――。どちらしかないが、どちらも小吉には無理なように思えた。戦って勝てるはずはないし、泳げない。しかし、より生きられる可能性のある方に賭けるしかない。小吉は目を閉じ、えいやと飛び降りた。濁流に飲み込まれた小吉はもがいた。死に物狂いで手足を動かした。激しい波に流されながら、小吉の顔は水面から出たり沈んだりした。岩をかすめ、掴もうと必死に手を伸ばしたが、小吉の身体は流れの勢いに抗えなかった。

小吉は流された。

どこまでも流された。

浮き沈みしながらも何とか水の流れに身を任せられた。しかし、体力が続かなかった。

結局、どちらの選択をしたところで自分は死ぬ運命だったのだろう、と小吉は観念した。

ふっと意識が遠くなり、身体が沈んでいく――。

夏の日差しは熱くてまぶしかった。

川岸に流れ着いた小吉は、重たそうに目を開けた。朦朧とした頭でも、命拾いしたことは分かった。が、嬉しくはなく、何の感慨もなかった。小吉は激しく咳き込んだ。大量の水を吐き出す。

空が青い。何処だろう。

ずいぶん流されたようだ。

見渡しても、まったく見知らぬ地だった。

命は取り留めたものの、刀を川中に失した。残ったのは身にまとっている粗末な具足だけ。侍の魂ともいえる刀をなくしたことに小吉は絶望した。生まれた村を苦々しく思い出す。

小吉は痩せた犬にかけるお情けのように、村に住まわせてもらっていた。家も畑も借り物で、貧しかった。ひと月前に母が死に、小吉が村に留まる理由はなくなった。小吉はすぐに村を出て行こうと思ったが、何をしたらいいのか分からない。そこに戦の話が舞い込んだ。これだ、と小吉は思った。侍になって村人を見返したかった。そんな小吉を村人はさらに馬鹿にした。

「小吉に何ができる」

「刀の握り方を知っているのか」

「馬に蹴られて死ぬのが落ちだ」

「どうせ怖くて逃げ出せずに決まっている」

そうなってしまった――。

青空がまぶしくて悔しくて、小吉は涙がとまらなかった。

我が身の情けなさを嘆いても始まらない。気持ちは萎えていたが、生きていたいという本能だけはあった。小吉は腹が減っていた。

やおら起き上がり、川岸から離れる。荒れ野を過ぎ、しばらく歩くと小道があった。でこぼこして埃っぽい。人里へ通じているだろうと、小吉は足を急がせた。

小さな村が見えてきて、さらに空腹感を覚えた。何でもいいから腹に詰め込みたい。

「もし、どなたかおられますか？」

一番近くの粗末な家の戸を開け、小吉は訊いた。

中は仄暗く、誰もいなかった。次の家にもいない。次々と訪れるがやはり誰もいない。

無人の村だろうか。それにしてはついさっきまで生活していたような痕跡がある――。

怪訝に思っていると、ひとりの村人が奥の家の陰から姿を現した。手に鎌を持っている。村の人は野良仕事へでていたのだろう、と小吉は思った。しかし様子がおかしい。小吉を恐れているようでもあり、また嫌悪しているようでもあった。

「何しに来た？」

威嚇するように鎌を握る手に力を込める。

「怪しい者ではありません。腹が減っております。なにか食べ物……」

村人がじろりと小吉を見る。その後ろからぞろぞろと他の村人が姿を見せた。同じように小吉に嫌悪の目を向ける。

「何もやるものはねえ」と、後ろの年寄りが云う。皆が頷く。

「後生です。腹が減って死にそうです」

小吉は手を合わせて拝んだ。一人ひとりに慈悲を請う目を向ける。

「そのなりだと戦に行ってきたようだな」と、若い村人が小吉の具足を舐め回すように見る。略奪をしにきた落ち武者だと思ったのだろう、急いで誤解を解かねばならない。

「行きはしましたが……戦っているうちに川に落ちてしまい、ここまで来た次第です」さすがに逃げてきたとは云えなかった。危害を加える意思がないことを身振りで示す。それでも村人は難しい顔をしていた。そして――理解に苦しむ言葉を口にした。

「蛙公卿の手先ではないのか？」

「蛙公卿？」

「蛙の化け物だ」

「いいえ、そんなもの知りません」

「本当か？」

村人が疑いの目を向けた。簡単には信じてくれないようだ。それは排他的からなのか、その化け物が恐ろしいからなのか、小吉には分からなかった。それにしても蛙の化け物とは何だろう。

「ええ、本当です」と、すぎる目で語気を強くする。

「本当だな」

まだ信用したわけではないからなといった顔で村人が云う。小吉はこくりと頷いた。

「ところで、何処まで行くんだ？」と、村人が訊いた。

「決めておりませんし、何処へ行ったらいいやら分かりません」

これから自分がどうなるのか、小吉は皆目、思い描けなかった。

「そうか……。とにかく早々に立ち去ることだ。途中で何か妙な気配を感じても、道を外れずにまっすぐ歩き続けろ。歩き続けていればいずれ城下にたどり着く、いいな」

厄介払いしたいのだろうか。しかし、このままここを出るわけには行かない。何か食っておかないと城下に着く前に行き倒れになりそうだ。

「いつでも出て行きます。ですが……その前に飯を」

村人が笑った。それは嘲りではなく、同情的な笑みだった。

「そうだったな。用意してやれ」と、後ろに控えていた十歳くらいの女の子に云う。娘だろうか、小吉をおずおずと見て家の中に消えていった。若い村人に続き、小吉も家に入った。娘の差し出す椀を受け取り、小吉は飯を掻き込んだ。量は少なかったが、心底、生き返った気がした。

若い村人は峰助と名乗り、ここ黒谷村の指導を担っていた。妻を病で亡くし、娘のお初とふたりで儉しく暮らしているとのことだった。小吉は御代わりを云えなくなってしまった。

「人生、悪いことがあればいいこともある。あんたもそのうち運が向くだろう。だが……蛙公卿にだけは関わるなよ。ろくなことにはならないからな」

蛙公卿――よほど恐ろしい化け物のようだ。

「どんな化け物なんです？」と、小吉は訊いた。

「どんなといわれても……俺も直に見たことはない。まあ、聞いた話だとただの蛙だそうだが、高貴な貴族の着物を着ていて、人の言葉を話すらしい」

「蛙が……ですか？」

目を丸くする小吉に、峰助が頷く。

「なにせ化け物だからな、人の言葉が話せるのだろう。よくは知らない。なにせよ、関わらないことだ。城下に限らず、新たな地での再出発だけを考えることだな」

小吉は礼を云い、峰助の家を辞した。お初が手を振り、ほかの村人も優しく見送ってくれた。

あの村に生まれていたら違った人生だったことだろう。用心深くはあったが、気のいい村人たちだった。叩き出されてもおかしくなかったのに、飯を食わせてくれた。親切にしてくれた峰助に感謝の念を抱きつつ、小吉は道を急いだ。風が心地いい。しばらくの間、山の緑や空の青さに心を奪われていた小吉だったが、長くは続かなかった。眼前の懸念が頭をよぎる。

これからどうするか――。

当てはない。行くところも、何をすることも思いつかない。頼る人はいない。食っていくためには盗人になるしかないか。そんな邪心が浮かんだが、それはあっさりとして捨て去った。人を脅す武器を持っていないし、戦から逃げ出すくらいだからそんな度胸もない。

考えをめぐらせても、やはり答えは出なかった。

生きていても仕方がない――そんな考えが脳裏にちらつく。

どれくらい歩いたのだろう、陽が傾き始めた。辺りに人家はなく、畑と森が見える。隣村はまだ遠いようだ。風が強くなった。土埃を舞い上げ、木々を揺らしている。妙な風だった。湿気を帯びていて、雨を呼びそうな気配があった。しかし、空を見上げてそんな様子はなかった。少しだけ赤みがかった空に、ぽつんと浮かんだ白い雲が風に流されている。

土埃のせいで小吉は目を開けていられなくなった。目を閉じ、風が収まるのを待った。すると誰かの呼びかける声が聞こえたような気がした。やがて風はやみ、小吉は目を開けた。

空耳か――。

小吉が再び当てもなく歩き始めると、今度は匂いがした。旨そうな匂い。魚を焼く匂いだった。近くで誰かが獲った魚を焼いているらしい。峰助の家で飯を食ったが、その量の少なさに、却って小吉は空腹感を覚え、その匂いは小吉の胃袋を刺激した。

小吉は匂いのする方に目をやった。こんもりとした森が静かに佇んでいた。匂いにつられ、足を向ける。畑を横切り、さらに近づくと旨そうな匂いが濃厚に漂っていた。

「こっちへ来い。たらふく食わしてやるぞ」

人の声がした。姿は見えないが、森の奥から発せられたようだ。小吉は森に足を踏み入れた。

「こっちだ、こっち」

呼びかけられるまま歩みを進める。夕暮れが迫っている森はほとんど暗闇とっていい暗さだったが、次第に目が慣れてきて、小吉はこの森が際限なく続いているのではないかと思った。

遠くに明かりが見えた。火だ。魚を焼いている火だろう、小吉は足を急がせた。

火の向こうに沼が広がっていた。深さは分からない。火の回りには数本の串が刺さっていて、魚があぶられていた。おそらくこの沼で獲れたものだろう。魚は大きな鯉だった。

誰もいない。

小吉は辺りを見渡した。確かに声を聞いたはずだが――。

「誰か、誰かおられませんか？」

小吉は串の鯉を見た。焼け具合がちょうどよくて早く食いたい。しかし、黙って食うのも憚れた。食わしてやると云われたものの、ひと言断わっておくべきだろう。

「これは頂いてもよろしいのでしょうか？」と、木々の向こうに訊く。

返事はない。

逡巡した小吉だったが、親切な人がおいて行ってくれたのだろうと解釈し、串を手を取った。

「ありがたく頂きます」

小吉はむしゃぶりついた。峰助の忠告など、とっくの昔に頭から離れていた。

腹が満たされ、眠くなった小吉は木々の間から漏れる月明かりを枕に横になった。

ふと目が覚め、小吉は半身を起こした。すると沼の向こうから薄ぼんやりとした明かりが見えた。蓮の葉に乗った何かが水面を渡ってくる。

蛍だろうか――。

それにしても大きかった。やがてその姿が判然とし、小吉は息を呑んだ。

蛙だ。

雨蛙のようだが、人の拳ほどあり、きらびやかな着物を着ている。身分の高い貴族とかが着るような代物だった。あれが蛙公卿なのだろう。化け物には違いなかったが、小吉は不思議と恐れなかった。蛙なのに気品があり、畏れ多い気がしてくる。

小吉は膝をつき、かしこまった。そうするのが自然に思われた。

「魚は旨かったか？」と、蛙公卿が訊く。

峰助が云っていたとおり、蛙公卿は人の言葉をしゃべった。奇異には思ったものの、小吉に驚きはなかった。

「はい、美味しく頂きました」

「それはよかった。腹が減っていては大事は行えないからな」

「大事？ 大事とは何です？」

小吉の胸中に一抹の不安がわいた。ただで食わせた訳ではなさそうだ。見返りに蛙公方は何かをさせる気である。そして、それを断らないと踏んでいる。それはいったい――

「なあに、簡単なことだ。鬼を退治してほしい」と、こともなげに蛙公卿が云う。

鬼を退治する――簡単だといわれても、そんなことが小吉にできるはずがなかった。

「わたしにはとてもできません」

「分かっている。いまのお前では無理だろうな。儂が刀を進ぜよう。それを使うがよい」

いつの間にか、小吉の脇に刀があった。古びてはいるが、見事な装飾の刀だった。

「これで……」

「ああ、お前はその刀を振るだけでいい。さすれば刀より光が放たれ、鬼を斬ってくれる。簡単であろう？ お前が傷を負うことはない」

刀を振るだけでいい――

傷を負うことはない――

なるほど、それくらいなら容易にできそうだ。しかも身に危険はない。しかし――

「本当に鬼なのですか？ 鬼が実在するとは思えませんが……」

蛙公卿が不気味な笑い声をあげた。

「儂を疑うな。人の姿をしていても鬼に間違いない。力は強いが、その刀の前では赤子も同然」

小吉の気持ちは軽くなった。目の前に化け物がいるのだから、鬼がいてもおかしくない。

「そういうことであれば引き受けますが……」と、小吉は気乗り薄に承諾した。まだ納得しかねることがある。

「どうしてわたしなんでしょう？ わたしが選ばれたのは偶然通りかかったからでしょうか？」

「偶然ではない。儂が招きよせた。なんとなればお前は見込みがある。儂が力を授ければ、お前は自身の中に眠っている力を存分に発揮できるであろう。さすれば出世は間違いないだ」

蛙公卿から見込みがあり、出世は間違いないと云われ、小吉は有頂天になった。人から蔑まれることはあっても褒められた記憶などない。これまでの汚名をそそぐ絶好の機会だと思った。

「それに……褒美もとらせるぞ」

蛙公方の思いがけない言葉に、小吉はにんまりとした。生まれてこの方、貧しい暮らししか送ったことがない。

「それで、その鬼は何処に？」と、急いで訊く。

「南へ半日歩いた村にいる。明日にでも退治に行こうと思うが、どうだ？」

一も二もなく小吉は承諾した。

「まだ何か訊いておきたいことがあるか？」

小吉は腕を組み、小首をかしげた。

月の明かりが辺りに満ちている。微風が過ぎていく。音は何もない。

「これは……夢なのでしょうか？」と、しばらく考えた末に訊いた。

蛙公卿がまたしても不気味な笑い声をあげた。嘲るような、揶揄するような笑いだった。

蛙公卿はぼんやりとした明かりを後方に残しながら、沼の奥へと消えていった。

夢を見ていたのだろうか、それともあの蛙の姿をした化け物は実際に存在したのか――。

小吉はいつの間にか眠りについた、夢の中で眠りについたのかもしれないと思いつつ。

木々の間からのまぶしい朝の光に小吉は起こされた。深い緑の水面が目に入る。

あの辺りから蛙公卿は現れたが、昨夜の出来事は現実だったのだろうか。

どう考えても夢を見ていたとしか思えなかったが、やはり現実だった。小吉の傍らに蛙公卿のくれた刀があった。明るい陽の下で見ると、いくぶん古びていた。これまでに数多くの鬼を斬ってきたのだろう。心なしか血の臭いがした。

小吉は鞘から刀を抜いてみた。鞘の古さに比べ、刀身はたったいま研がれたばかりのように鋭い光を放っている。相手に触れなくとも、近づけただけで斬れそうな感じがした。振るだけで鬼が斬れると云っていた蛙公卿の言葉は、まんざら嘘ではないようだ。自分にもやれる、そんな実感が湧いた。件の鬼が何処にいるのかは分からない。が、何とかなると小吉は思った。蛙公卿の云うことを聞いていればすべてがうまくいくだろう。

刀を腰に差し、意気揚々と小吉は南を目指した。

蛙公卿のくれた鯉を食べていたお陰か、いっこうに疲れることはなかった。むしろ気力は充実していた。生まれて初めて何かを成せそうな自分が頼もしくもあった。

いくつかの村を過ぎ、半日ほど歩くと、畑仕事をしている村人がいた。鍬を振っている。村人は突然やってきた小吉に戸惑いつつも、時候の挨拶でもするかのように愛想のいい笑顔を見せた。距離的にこの村に違いない。鬼のことを知っているだろうと思い、小吉は声をかけた。

「この近くに鬼、いや鬼のような奴がいませんか？」

柔和だった村人の顔がにわかに掻き曇った。

「あいつの知り合いか？」と、警戒するように訊く。

「いえいえ、そうではありません。住処をご存知でしたら教えていただきたいのですが」

なおも村人は怪しんでいた。小吉を胡乱の目で見る。

「牛松なら村のはずれの廃寺に住みついているが……知ってどうする？」

「わたしが退治して差し上げましょう」と、小吉は高らかに云った。

「あんたが？」

村人が破顔一笑する。

「こう云っては何だが、とても牛松に敵うとは思えん……」

「見くびらないでください」と云い、小吉は腰の刀に手をかけた。

「ふむ、見事な刀だな。まあ、退治してくれるのであればありがたい。なにしろ人を人とも思わぬ非道の輩だからな、大勢の村人がやつに泣かされてきた。しかし、本当に……」

疑念を抱きつつも、村人は廃寺への行き方を教えてくれた。山の中腹にあるらしい。

村を外れ、細い道を登っていくと廃寺はあった。屋根や壁が朽ち、ところどころ崩れている。墓も荒れている。いかにも物の怪が棲んでいそうな雰囲気が出て気味が悪い。

陽はすでに落ちかけていて、辺りは紅く、暗くなってきた。人魂が出てきてもおかしくない。心もとなくて、小吉は蛙公卿の刀を強く握った。すると、雑草の生い茂る薄暗い境内の隅に、何かぼうっと光った。蛙公方だ。いつの間にかついてきていたようだ。小吉は蛮勇を呼び起こした。

「お堂の中に牛松が寝ている。起こせ」

命ぜられるまま、小吉はお堂に向かった。石段に足をかける。

「やい、牛松！ 出てきやがれ！」

どんなやつが出てこようと造作なく斬ってやる、と内心思っていたが、ぬっと姿を現した牛松の容姿はまさに鬼のようで、酒を飲んだかのように赤ら顔をしている。小吉は思わず後ずさった。

。

「何の用だ？」と、牛松がぎろりと睨んで問いかける。不機嫌な声には怒りが含まれていた。

「ずいぶんと人様に迷惑をかけたようだな。退治してやるから覚悟しろ！」

一瞬の静寂の後、カラカラと高笑いが響き渡る。

「退治するだと？ 本気で云っているのか？」と、牛松が小馬鹿にした冷たい目を向ける。

「ああ、本気だ。お前は生きているに値しない」

「ふん。何を偉そうに。ならばどうする？」と、牛松が不敵に笑って云う。

「斬り捨てるまでだ！」

小吉は腰の刀を抜いた。昇り始めたばかりの月の光をきらりと映す。これで牛松も少しは怖気づくだろう、と小吉は思った。しかし、怖気づいたのは小吉のほうだった。牛松は背中に隠し持っていた刀を振り上げ、恐ろしい形相で小吉に向かってきた。戦場での敵兵を思い出し、小吉の身体は固まってしまった。あっけなくやられてしまう、そう思った刹那、小吉の口が勝手に動いた。

「鬼め、姿を現せ！」

牛松の身体が鬼に変化すると同時に、小吉の腕が何かに操られるように動いた。

刀から一閃の光が放たれ、鬼と化した牛松の軀を真っ二つに切る。二つの肉塊が地面に倒れた

。斬られた身体の内から黒い煙が立ち上る。それを蛙公方が嬉しそうにぴょんぴょんと跳びはねながら、舌を伸ばして喰らう。あっという間に黒い煙は蛙公方の身体に飲み込まれてしまった。地面のは二つの肉塊が虚しく転がっている。

「よくやったぞ、小吉」

蛙公卿の誉めの言葉を、小吉は恍惚感の中で聞いていた。英雄になった気がし、未来が拓けたと思った。と同時に、何か釈然としない思いもあった。

「これでよかったのでしょうか？」

「何か不服か？」と、蛙公方が問い返す。

「不服ではありませんが、いくら鬼とはいえ……」

蛙公卿の顔が歪む。

「仏心か。くだらん。不服ならこれでどうだ」

そう云うと、蛙公卿は何かをぷっぷつと吐き出した。光り輝くものが小吉の目の前に落ち、小吉が驚いていると、それは小さな山となった。

「これは黄金ではありませんか……」と、小吉は心を奪われて云った。

「さよう。これはほんの手始めだ。牛松は金を持っていなかったから農から褒美をとらせたが、次は違うぞ。村人から金をかすめ取っている鬼を退治する。そうすれば蔵の中の金はお前のものだ」

牛松を殺したばかりで、小吉の脳裏には残虐な場面がこびりついている。しかし、黄金色の前にその罪の意識は消え去っていた。操られていただけの身体も疲れてはいなかった。

「では早速これから」と黄金を拾い上げ、意気込んで小吉は云った。

「ははは。急ぐでない。牛松を退治したとなればそこの村で歓待してくれるだろう。まずはゆっくり英気を養え。そのときが来たら知らせに来る」

ほのかな明かりの残影を残し、蛙公卿は闇に消えた。

小吉が来た道を引き返し、麓に下りると、そこにはさきほどの村人がいた。

「生きているところをみると、どうやら牛松はいなかったようだな。殺されると分かっていた道を教えたようで心苦しかったんだ。まあ、なんにしてもよかった。こんなところは早く離れたほうが無難だ」

村人が道を急ぐ。

「牛松はもういない」と、村人の背中に小吉は云った。

振り返って村人が怪訝な顔をする。

「いない？ 何処かへ行ったのか？ しかし、そんなことをどうして知っている？」

「俺が送り届けたからな」

小吉は得意満面だった。

「何処へ？」

「あの世だ」

「あの世……殺したのか、本当に？」

「ああ。俺が殺した。だからもう牛松に悩まされることはないぞ」

小吉は薄笑いを浮かべた。暗に、誰のお陰か分かっているな、と告げる。その意を村人も察したようで、当惑しながらも愛想笑いを浮かべた。

「ありがたいことです。あなたは村の恩人でございます」

改まった村人の口調が小吉は可笑しかった。

蛙公卿の言葉どおり、夜も更け始めていたにもかかわらず小吉は歓待された。滅多に飲めない酒をたらふく飲み、旨いご馳走で腹を満たした。おそらく村にできる精一杯のもてなしだっただろう、無理をしているのかもしれない——そう推察したが、小吉は悪びれなかった。当然の対価、そう思った。酔った小吉は床にごろりと横になった。蛙公卿の刀をしっかりと抱きしめ、これから先の自分の栄達を思い描きながら——

翌日から蛙公卿の帰りを待っていた小吉だったが、蛙公卿はなかなか現れなかった。歓待してくれた村人も、いつまでも小吉にかまってはくれなかった。それぞれの仕事があり、暮らしがある。

忘れられたのではないだろうか——ひとりでいることに不安を覚えた小吉は、沼へ戻ろうかと思った。その矢先、蛙公卿が蓮の葉に乗り、宙に姿を現した。月の輝く夜だった。

「遅くなってすまなかったな。こう見えて、僕は忙しい身でな」

忙しいとは一何をやっているのだろう。

気にはなったが、小吉は訊くことができなかった。蛙公卿の威圧感の前に畏まるばかりだった

。

「次の鬼……金を溜め込んでいるという話でしたが」

「ああ。善衛門という隣村の長老だ。村の民を騙して余剰米を銭に換え、溜め込んでおる」

「余剰米？」

「この数年不作でな、そのため殿が年貢の取立て率を低くしてくださったのだが、そのことを村人に報せず、元のまま集めているのだ。そして私物化した」

「何ということを……」

「信頼を得た鬼はたちが悪い。成敗いたせ」

小吉の中の正義感がうずいた。小吉の村も貧しく、年貢の取立てが厳しくなかったらどんなにいいだろうと思ったものだ。せっかく殿が慈悲を示してくださったというのに、それを己の欲望に変えてしまうとは何と罰当たりな――。

「そんな奴は赦せない」

牛松を斬った際には多少の後ろめたさを覚えた小吉だったが、善衛門に対してそんな気は起きなかった。むしろ積極的に斬ってやろうとさえ思った。

「それでこそ儂が見込んだ男だ。お前の出世は疑いない」

「わたしが善衛門を斬るのは出世のためではありません、村人のためです」

「わしが思っていたよりもお前は好漢のようだな。ますます気に入った」

蛙公卿が細い目をさらに細める。

「さあ、すぐに参りましょう」と、小吉は勇んで云った。

「そう云うだろうと思っていた。では、いくぞ」

小吉の前を、蛙公卿が身体をぼんやりと光らせ、宙をゆっくり飛んでいく。小さな存在だが、付き従っている限りいかなる望みも叶いそうだ、と小吉は思った。

月明かりの中、やがて大きな屋敷の前についた。村の他の家が粗末なだけに、異様な印象を受ける。他を力づくでねじ伏せるような、圧倒的な力の差、そんなものが感じられる。

「善衛門をここに呼べ」と、蛙公卿が命じる。

背中に蛙公卿の存在を感じながら、小吉は戸口に向かった。

「やい、善衛門！ 出てこい！」

家の中にざわめきが起こり、明かりが灯った。不審の顔で男が出てきた。屈強そうでまだ若く、善衛門ではなかった。腰に刀を差して、いつでも抜けるように柄に手をかけている。

「こんな時間に何のようだ？」と、用心棒らしい男が目を細めて小吉を睨みつける。

「お前ではない。善衛門に用がある」

「すでにお休みだ、明日の朝、出直せ」

「話にならん。出てこないなら踏み込むまでだ」

「分からん奴だな。物取りか？ ならば斬り捨ててやる」

男が刀を抜いた。堂々としたその様に、慣れている、と小吉は思った。元はれっきとした侍なのだろう。戦にも行ったことがあるのかもしれない。しかし、怖くはなかった。蛙公卿の刀をもってすれば、こんな男などあつという間に真っ二つだ。

「お主を斬ってももつたらん。俺が斬りたいのは鬼だ」

「鬼？ 鬼とは誰のことだ？」

「にぶいな。善衛門に決まっているだろう」

「善衛門様が鬼だと？ 馬鹿も休み休み云え。善衛門様は名前のお通り、善いお方だ。善衛門様を鬼呼ばわりするとは赦せん」

男が刀を構えた。

無駄な殺生はしたくなかったが――。

仕方なく小吉が刀を抜こうとしたときだった。男の後ろから声がした。

「なんの騒ぎだ？」と云いながら、白髪の老人が下男を従えて姿を現した。

「起こしてしまいましたか、申し訳ありません。この者が……」

切っ先を小吉に向け、先の男が苦々しく云う。

善衛門も視線を小吉に投げかけた。人を見下す冷たい目をしている。

「物乞いか？ ならば他を当たれ」

それだけ云うと、善衛門は家の中へ引き返そうとした。

「待て！ 鬼！」

軽くあしらわれたことに小吉は腹が立った。

「鬼だと？」

善衛門が訝しげに小吉を見つめ、そしてひょいと横へ動いて小吉の後方に目をやった。

「蛙公卿……どうしてここに？」

善衛門が不思議そうな顔をする。

「蛙公卿を知っているのか？」と、小吉は訊いた。

「知っているもなにも……」

小吉は善衛門が何を話すのか聞くつもりでいたが、頭とは裏腹に口が勝手に動いた。

「鬼め、姿を現せ！」

善衛門の姿が鬼に変化する。牛松と同じで、鬼は言葉にならない唸り声を上げ、近くにいた用心棒の男の襟首を掴むと、小吉目がけて軽々と放り投げた。小吉はさっと身をかわした。投げられた男は恐怖の顔で小吉の横に頭から落ち、首の骨を折ったらしく、ぴくりとも動かなくなかった。

突進してくる鬼めがけ、小吉は刀を抜いて振った。光が放たれる。鬼と化した善衛門の躰が二つに斬られた。倒れた鬼の身体から黒い煙が立ち上り、いつの間にか蛙公卿が小吉の前にいた。長い舌を伸ばし、飛び跳ねながら煙を舌に巻きつけて喰らう。

善衛門の家族なのだろう、女子供が戸口に隠れ、恐ろしそうに外の様子を窺っていた。ほかに二人の下男らしき者がいた。善衛門の家族を屋敷から追い出し、蔵に案内しろ、と小吉は下男の一人に命じた。下男が怖ず怖ずと小吉を裏手の蔵へ連れて行く。

「こちらでございます」

戸を開ける下男の後ろに回り込み、小吉は中を覗き込んだ。中には米俵がうずたかく積まれていた。その積み方は不自然で、奥に何かを隠しているようだった。それは銭だろうと小吉は当たりをつけた。下男を押しつけ、米俵の背後に回り込むといくつかの木箱があった。

「ふたを開けろ」と下男に命じる。

下男はふたに手をかけると、それまでの怯えた様子を豹変させ、木箱を持ち逃げようとした。すかさず小吉は刀を振った。光こそ放たなかったものの、刃先が下男に当たった。肩口を斬られた下男がひえっと短い悲鳴を上げ、木箱を落とした。がしゃりと鈍い音がする。銭が辺りに散らばった。小吉の手に、初めて人を斬った感触が残った。

「盗っ人め」と、小吉は吐き捨てた。

肩口の傷を押さえながら下男は這々の態で逃げていった。

散らばった銭をかき集め、小吉は感慨にふけた。

これで本物の金持ちだ――。小吉の中の、村人のためという思いは掻き消えていた。

自分を馬鹿にした故郷の連中が脳裏に浮かぶ。その一人ひとりを膝まづかせる。

「これしきの事で満足するなよ」

蛙公卿が悦に耽っている小吉に、諫めるように云う。

「えっ？」と、小吉は不審の声をあげた。

充分な気がする。生まれてこの方、見たこともない大金。これ以上なにを望むというのか。

「分からんのか？ お前はまだ小さな村を手に入れたに過ぎないのだぞ」

「小さな村……」

「そうだ。お前の才覚を持ってすればもっと大きな領地が手に入るというのに、こんなところで満足していいのか？ ほんの少し出世しただけではないか」

蛙公卿の云うとおりだ。

俺はもっとやれる――。

小吉の中に、沸々と湧き上がるものがあった。

「申し訳ありませんでした。せっかく目をかけていただいたのに、ご期待を裏切るところでした」

「お前は儂の云うとおりに働いておればいいのだ。そうすれば銭も名誉も思いのままだ」

「ははっ」

小吉は改めて平伏した。蛙公卿がついてくれば全ては可能だ。

「次は？」

騒ぎを聞きつけ、遠巻きに見てる村人たちを見やりながら小吉は訊いた。村人たちは自分たちを騙していた善衛門に憤り、小吉の勇剛を褒めたたえていた。

「次は……今までのようにはいかん」

「とおっしゃいますと？」

小吉は不安に苛まれた。思えばこれまでは簡単すぎた。刀を一振りするだけで鬼を斬ることができた。ほんの一瞬で大金を得られた。だが、これ以上となるとやはり容易ではなさそうだ。

「相手は三十人からの山賊だ。鬼が山賊を束ねている」

三十人。そんな人数を相手にできるわけがない。怯えが顔に出た。

ふふふ、と蛙公卿が含み笑いを漏らす。

「なにも三十人を斬れというのではない。斬るのは鬼の頭目ひとりで充分だ。他の雑魚は大して戦力にはならないが、それなりに手当が必要だろうから、そこの銭で兵を雇え。また来る」

蛙公卿はまたしばらく姿をくらませるようだ。何処へ行くのか知りたくもあったが、小吉はそれどころではなかった。対抗できるだけの兵を急いで集めなければならない。

里長となった小吉は、早速、もう一人の下男、弥平に命じて村の男に声をかけさせた。侍を雇いたかったが、村には百姓しかおらず、金につられてきた中から屈強な者を選ぼうと考えた。十人くらいはすぐに集まるだろうと目論んだが、弥平が連れてきたのはたったの二人だった。しかも何日も飯を食っていないような痩せこけた百姓だった。年だけは食っている。

「他にはいなかったのか？」と、小吉は詰問した。

「申し訳ございません。皆、畑仕事が忙しいとのことで……」

「金を払うと確かに云ったのか？」

「もちろんです。ですが……」

下男の弥平が云いにくそうに口をつぐんだ。

「何だ、云ってみろ」

「では……怒らないでください、村の連中が云ったことですから。村の連中が云うには……金はもともと自分たちのものだし、それに、山賊を退治するとおっしゃいますが、あの山賊が村を襲ったことはありません。善衛門様が上納金を差し出していたのです」

「上納金を……」

小吉の心は揺れた。上納金を差し出せば山賊が村を襲うことはないだろう、そうすればこのままこの村で里長として暮らしていける。だが、それでは蛙公卿の命に背くことになる。

弥平が上目遣いに、これまでと同じように上納金を差し出せばいいではないか、と云っている。

そうかもしれない。兵が集まらなければ山賊を相手に勝ちは見込めない――。

「上納金は……やらん」と、小吉は決然と云った。

できないことを蛙公卿が云うはずがない。頭目さえやっしまえば他はおそらく烏合の衆、恐れるほどでもないだろう。なにより、里長の地位に留まりたくなかった。蛙公卿が保障してくれたではないか、俺の才覚を持ってすればもっと大きな領地が手に入ると。

数日待ち、結局、集まった人数は五人だけだった。小吉を合わせて六人。下男の弥平は加わらないだろうと思っていたが、意外にも山賊退治に参加したいと申し出た。

「お前も金が欲しいのか？」と小吉は訊いた。

「それはもちろんですが、それよりもこれから先、下男として生きていたくはありません」

弥平が善衛門に虐げられていた己の苦境を熱く語る。

小吉は弥平の血走った目に、少し前の自分を見る思いがした。自分も生まれ故郷を捨て、戦に出かけて行った際にはこんな風に這い上がることしか考えていなかった。親しみを覚えた小吉は、思いついた企みを弥平に持ちかけた。

「弥平は山賊の誰かを見知っているか？」

「善衛門様について行ったことがありますので、何人かは……」

怪訝そうな弥平に、小吉は不敵な笑みを見せた。

「金で何とかかなりそうか？」

「おそらく……。頭目の勘輔を慕っている者などおりません。やることがなく、いくところがなく、仕方なく山中の暮らしをしている、そんな連中ばかりです」

「そうだろうな」と、小吉は満足そうにうなづいた。

金は惜しかったが、遣い方次第では兵力を倍増することができる。

小吉は山賊の買収を弥平に任せた。子分が寝返れば、頭目の勘輔は裸同然。そうなれば蛙公卿の刀で楽に仕留めることができる。そして山賊の金をいただく――。それでも少なからず不満があった。山賊を滅ぼしたところで領地を得られるわけではない。

小吉の期待以上に弥平は働いてくれた。こっそり山賊の巢窟に忍び込んだ弥平は、勘輔にばれないよう最善の注意を払い、十人を確実に味方につけることができた。十人が内紛を起こし、それに乗じて小吉が頭目の勘輔を討つ――この計画が上手くいくのを小吉は疑わなかった。

久しぶりに姿を現した蛙公方が先を行き、小吉、弥平があとに続いた。その後ろを金で雇った村人がついてきたが、いざとなると武具に身を包んでいても彼らは怯えていた。

雇った五人は互いに顔を見合わせ、中空の蛙公卿をちらちら盗み見ては小声で話し合った。

「見るよ、なんともおぞましい化け物じゃないか」

「わしらは化け物の手先になるのか？」

「話が違う。化け物のいうことなど聞けるか」

「残りの金は本当にもらえるのか？」

「金より命だ。化け物に関わっては命がいくつあっても足りない」

一人抜け、二人抜けし、残りの三人がいっせいに振り返って道を駆けて行った。

「卑怯者！ 逃げるな！」

小吉が怒声を浴びせても、五人は止まることなくあっという間に見えなくなった。

「これだから百姓は信用できない。臆病なやつらめ」

吐き捨てるように云う小吉に、弥平が先を急ぐよう促した。

小吉は渋面をつくった。金をみすみすくれてやったことが悔しくもあったが、弥平と二人というのはあまりに心細かった。これで山賊に立ち向かえるだろうか――と思う。山賊の買収が上手くいってくればいいが、そうでなければ殺されに行くようなものだ。

先を行く蛙公卿は、何の憂いもないようにすいすいと宙を飛んでいる。小吉はひと安心した。蛙公卿に従っていれば万事は上手くいくに違いない。

山道に入る。

曲がりくねった狭い道が続き、勾配が険しくなる。辺りは閑寂としていて、月の明かりもほとんど届かない。後方から弥平の荒い息遣いが聞こえた。なれない山道に弥平も苦勞しているようだ。

と、山道の先にうち捨てられたものがあつた。

何だろうと目を凝らしてみると、それは死体だった。うち捨てられた死体――。近づき、さらに観察してみると、背中から一太刀に斬られていた。

後ろから弥平が首を伸ばした。

「こいつは山賊の仲間です」

どうやら計画どおりに内紛が起こったようだ。雇った村人には逃げられてしまったが、これで山賊の頭目である勘輔を討てるかもしれない。

道をのぼると、もうひとつ死体があった。こちらも背中を斬られ、無造作に捨てられている。辺りに争った様子はなく、どこかで殺されてから捨てられたようだった。

「ううむ」と、弥平が顔をしかめた。

「どうした？」

「さっきの死体もこれも、どちらもわたしが金を渡した者です。どうしたことでしょう？ 買収が発覚したのではないのでしょうか？」

発覚――。

ということは、味方は弥平だけ。蛙公卿もいるが、やつは直接手を下すわけではない。勝てるだろうか。その前に、頭目に近づけるのだろうか。

小吉の中に、猛烈な不安が湧き上がる。

二つの死体――これみよがしに、お前たちもこうなるぞと脅しのために置かれたのだろう。

小吉の足は先へ進もうとしなかった。

三つ目、四つ目の死体がこの先にあるに違いない。そして頭目の勘輔は、準備万端で自分たちの到着を待ち構えているに違いない。逃げるなら今だが――

「なぜ立ち止まる？」

いつの間にか蛙公卿が目の前にいた。

「多勢に無勢、とても太刀打ちできません」

小吉は心情を吐露した。無理だ。このまま進めば自分もこのふたつの死体と同じ運命になるのは確実に思えた。死にたくはない。

「いいから進め。退くことは許さん」

静かにゆっくりと、蛙公卿が有無をいわさないように云う。

「とにかく参りましょう」と、弥平も小吉をせつつく。

小吉は仕方なく足を進めた。弥平の後塵を拝したくはなかった。

山の道は険しく狭くなっていく。ついには切通しになって、人がやっとひとり通れるほどになった。もちろん馬では通れない。おそらく、攻めてくる者をここで一人ひとり始末するために造られたのだろう。小吉は身構えた。どこからか矢が飛んでくるかもしれない。しかし、そろりそろりと歩いていっても、矢が飛んでくることはなかった。

山賊の住処に近づくにつれ、辺りは次第にひらけてきた。防塁、防柵が張り巡らされていて、その中央に小さな城ともいえる砦があった。ただの山賊ではなさそうだ。門も堅牢で、小吉は恐る恐る中に入った。誘い込むように開けてあり、生きて出られないのではないかと思った。

「引き返さなかったところをみると、相当な馬鹿のようだな」

上から声がした。檣から男が身を乗り出し、気味の悪い笑いを浮かべている。そこへ蛙公卿がすうっと寄っていった。男の顔が引きつる。

「ば、化け物……」

「勘輔を呼んで来い」

「お頭を呼び捨てにするとは……」

蛙公卿の命令を男は渋っていたが、異形の前にどうにもできないと思ったのだろう、慌てて櫓を降り、転がるように砦へと向かった。

蛙公卿が今度はふたりに命令した。

「門を閉じ、かんぬきを掛けろ」

自ら袋の鼠になるというのか。

玉の汗を落とし、ふたりがかりでやっと重い門を閉じる。かんぬきは弥平が掛けた。

「ふたりとも櫓に登れ」

矢継ぎ早に蛙公卿が命令する。櫓に登って何をやろうというのか。

不審に思いながらも云われるまま、小吉は櫓に登った。弥平が後に続く。

砦からぞろぞろと屈強で残忍そうな男たちが現れた。それぞれに武器を携えている。

「先頭が頭目の勘輔です」と弥平が耳打ちする。

なるほど、力づくで従わせているのだろう、他を圧倒するくらいにひと回り身体が大きい。薄笑いを浮かべ、髭面の口を開いた。

「蛙の化け物と聞いて、もしやと思ったが、やはりそうだったか。わざわざやってくるとは何の用だ？ もう俺に用はないはず。まだ藤堂殺害をやらせようというのか」

蛙公卿と頭目の勘輔は旧知のようだ。勘輔だけではない。里長の善衛門も見知っていた――。

「お前に用がなくとも儂のほうにはある」

「まさか怒っているのではあるまいな。殺害をしくじったのは俺のせいではない」

「あれは不測の事態だった。その話はもうよい」

面倒臭そうに蛙公卿が云うと、頭目の勘輔は憤りの色を見せた。

「いや、よくない。話を違えたのはそっちないではないか。俺は気ままに生きていただけだ。この砦は護るにはもってこいの造りになっている。こちらから攻めて出なければ滅ぼされることはない。俺は好きなときに好きなことができればそれでいいのだ。それだけだ、もう構わないでくれ」

「喜べ。これが最後の訪問だ」

蛙公卿の言葉に、勘輔が安堵の顔をする。

「そうか。分かってくれたか。それで用向きは何だ？ 子分を買収したりと姑息なことをするから、俺を亡き者にしようと思つたのかと思つたぞ。お陰でふたり始末した。逃げた者もいて、残つたのはこれだけだ。それでも、そこのふたりには荷が重いだらうな」

頭目の勘輔が櫓の小吉に鋭い視線を向ける。

「尻尾を巻いて逃げ帰ったほうが身のためだぞ。それとも上納金を持ってきたのか？」

そうしたほうがよかったのかもしれない。櫓にいるから今のところは安全だが、いつまでもこうしている訳にはいかない。いったい、蛙公卿は何を考えているのか――。

そのときだった。小吉の口がまたしても勝手に動いた。

「鬼め、姿を現せ！」

勘輔の巨軀が鬼へと変化する。恐ろしい形相で唸り声を上げる。

子分どもは突然のことに動揺し、顔色を失った。逃げ惑う子分どもを鬼は追いかけ、次々に手にかける。手足を引き裂き、頭にかじりつく。辺りは阿鼻叫喚の世界になった。刀を持って立ち向かう者もいたが、鬼の身体を覆う毛は鋼のように硬く、何の役にも立たなかった。

門へ逃げた子分もいた。しかし、かんぬきが掛けられていてなかなか開けられない。鬼と化した勘輔が咆哮をあげ、獣の足で駆ける。恐怖に身を竦ませた子分をあっという間に叩き殺す。もう殺すべき子分はいない。そして鬼は櫓に目をやった。赤く血走った目で蛙公卿を、小吉を睨みつけ、振り落とそうと櫓に掴みかかる。ゆさゆさと揺れ、小吉は生きた心地がしなかった。光る刀を振り下ろせばいい、そうすれば鬼の身体は真っ二つになるはずだ――それは分かっていたが、立っておられず、床に伏しているしかなかった。弥平も青い顔で欄干にしがみついている。ふたりが為す術なくおののいていると、小吉の目の前をぼんやりとした光が通り過ぎた。蛙公卿だ。蛙公卿は鬼の頭上に下り、ふわりふわりと浮かんでは近づいたり遠のいたりしている。叩き落そうと鬼が巨木のような腕を振り上げる。しかし、蛙公卿はすんでのところかわし、またしてもからかうかのように鬼の顔の前を飛び、鬼の頭上を過ぎていった。鬼が櫓を掴んでいた手をすっかり放し、後ろを振り返る。遠のく蛙公卿を追いかけ、腕を振り回す。

櫓の揺れは収まった。

鬼が背中を向けている。がら空きの背中――斬るのは簡単そうだ。

しかし、いくら鬼とはいえ、小吉はためらった。

背中を斬るのは卑怯な気がする。そう思ったが、身体が勝手に動いた。抗ってはみたものの、それは一瞬のことで、小吉は蛙公卿に操られるままに刀を振った。

鬼の身体が背中から真っ二つになる。

どうと巨躯が倒れ、切り口から黒い煙が立ち上る。蛙公卿が嬉々として寄っていき、舌を伸ばして掠め取る。それが終わると満足そうな笑みを浮かべ、またもや小吉に命じた。

「首を切り取れ」

すでに死んでいるのに首を切り取るとはどういうことだろう。そんな必要があるのだろうか。

小吉の疑問を察したかのように、蛙公卿が口を開いた。

「放蕩の勘輔は金を持っていない。が、その首には金に代わる価値がある。手土産にしろ」

「手土産？」

「侍になりたいのだろう、小吉」

「それはなりたいですが……」

「ならばその鬼の首を持って、有力家臣の藤堂重永に差し出せ。藤堂は何度も勘輔の討伐を試み
ていた。その度に失敗し、苦々しい思いをしていたから喜ぶぞ。家臣のひとりに取り立ててくれるのは必定だ。お前が希求してきた夢が叶うときが来たのだ」

そういうことか。金を得られないのは残念だが、これで念願の本物の侍になれる。

小吉は戦場を勇ましく駆け回っている己を夢想した。初陣だったあのときの自分と今の自分は
違う。きっと活躍し、手柄を上げられるはずだ。出世も果たせるだろう。しかし――

目の前に鬼が転がっている。首を切り取らなければならない。斬り殺すのは遠くから刀を振り
回せばよかったが、首を切り落とすのは刃を首に直接当てなければならない。

「弥平、やってくれるか？」

おぞましく思った小吉は、弥平に頼んだ。やらずに済むのなら、できればやりたくない。

弥平が困惑の顔をする。

「わたしがやってもよろしいのですか？」

「ああ、もちろんだ」

「では、手柄はわたしのものということで……」

薄い笑みを見せ、澄ました声で弥平が云う。予期しなかった言葉――

小吉はあせった。弥平は自分と肩を並べたいと考えているのではないか、と思えた。小吉と弥平の関係は微妙だった。今は優位に立っているとはいえ、確かな主従の誓いを立てた訳ではない。

「お前は何もしていないではないか、櫓でぶるぶる震えてただけで。俺がやる。手柄は俺のものだ、誰がお前なんぞに……」

意を決し、鬼の顔に目を向ける。閉じられた目が今にも開きそうだった。ぎろりと睨み、起き上がってくるような気がする。死んでいると分かっている、厭な想像が湧いてくる。

小刀を鬼の首にあて、小吉は目を閉じた。力をこめる――

肉の感触と血の臭いに吐き気が込み上げる。言い知れぬ嫌悪感を抱きつつ、小吉はやり遂げた。侍とはこういうものだ自分に云い聞かせる。

砦の中へ入り、適当な布を探して首を包む。槍の先につるし、小吉は高々と掲げた。

「戦場で首を獲った気分だ」と、高揚した声を上げる。

「よくぞやった、小吉。ここはまさに戦場だった。これで本当の戦場に行ったとしても臆することはないだろう。小吉よ、お前は勇猛になった。儂が見込んだとおりだった。もっと上を目指せ。ただの侍になるだけでなく、ひとかどの武将となれ」

ひとかどの武将――

なんと甘美な響きだろう。

小吉は鎧甲冑に身を包み、馬で駆ける己の凛々しい姿を夢想した。勇猛果敢に敵兵をなぎ倒して行く己に陶醉し、もはや藤堂重永の家臣になる気は失せていた。

「この首……藤堂様の元には届けたくありません」

「なに？」

蛙公卿がその短い首を傾げる。

「藤堂様の家臣にはなりたくないということです。わたしは殿の直参になりたいのです。藤堂様と同列の、殿の家臣になりたいのです」

「しかし……」

蛙公卿は了承しかねるふうだった。気難しい顔を小吉に向ける。

「何かご不満ですか？」と、小吉は訊いた。

「いや……不満ではない。小吉の出世は農も嬉しい限りだ。ただ……」

「ただ？」

「農が考えていたのは、小吉が藤堂に取って代わって殿の家臣になるということだった」

「藤堂様に代わって……？ 藤堂様を亡き者にするというのですか？」

蛙公卿は山賊の頭目、勘輔にも藤堂を殺させようとしていた。勘輔はその命惜しさに、砦から出て藤堂と戦おうとしなかったが――。

「藤堂は死ななければならない」

蛙公卿の声には憎しみがこもっていた。

それまで黙って小吉たちの話を聞いていた弥平が口を挟んだ。

「なぜでございます？ 藤堂様が死ななければならない理由とは？」

蛙公卿がその濁った目をゆっくり弥平に向ける。

「それは……藤堂が鬼だからだ」

またしても鬼――

小吉は奇妙な思いがした。行く先々に鬼が現れる。それは偶然なのだろうか。

弥平も納得しかねるようだ。

「藤堂様が鬼でございますか……。確かに、昔はずいぶん酷いことをなさいましたが、このところは有徳をもって民衆に接しておられます。慈悲深いお方だと聞き及んでおりますが、本当に……」

「儂が信じられないのか！」と、蛙公卿が声を荒らげた。

弥平に向けられた言葉だったが、小吉はびくりとした。

「いえ、そんな」

恥じるように、弥平が身を縮める。

「藤堂は己の欲得を隠している。国を乗っ取ろうと企んでいるが、それを悟られないよう今は善人のふりをしているだけだ、今に本性を現す」

有力家臣が国主にとって代わる――よその国ではそんなことも起こっていると聞く。

「なんとだいそれたことを……」

嘆息する小吉に、蛙公卿が鷹揚にうなづく。

「鬼が国を乗っ取ろうとしているのだぞ、それでいいのか？」

「いいはずがありません」と、小吉は毅然と云った。

満足そうに蛙公卿がもう一度うなづく。

「それに……殿は天子様につながるやんごとなき血筋。そこへ弓を引こうとしているのだから、それだけで万死に値する。小吉よ、藤堂を殺せ！ 亡き者にしろ！」

蛙公卿の勢いに押されるまま、小吉はかしこまった。だが内心、違和感を抱いた。

最初は鬼だから殺せといていたのに、あとでは理由が違っている。天子様につながる殿に敵対する者は赦せない――血筋を護りたい、それが本当の理由なのではないだろうか。

どうであれ、小吉の次の標的は動かさないようだ。藤堂に対する蛙公卿の私怨とも思える固執が気になるが、蛙公卿がいなければ何もできない小吉は蛙公卿に従うしかなかった。

小吉と弥平は山賊の山を下り、里長だった善衛門の屋敷に戻った。

その日が来るまで待っておれ、と云い残し、蛙公卿はまたどこかへ去って行った。

山賊退治の話聞きつけ、近在の村からも大勢の人が集まってきた。屋敷の周りを取り囲み、皆が小吉をまぶしそうに見やる。

小吉と弥平のふたりで三十人の山賊をやっつけた――そう信じている者がほとんどで、家来にしてほしいという者も多く、小吉は戸惑いながらもまんざらでもなかった。

宴席も終わる頃、小吉を頭領にいただく十人ほどの武士団が結成され、弥平が家臣の筆頭となった。部屋の隅でおとなしくしていた弥平が驚きの顔をする。この屋敷で弥平は下男だった。弥平の出自を知っている者は不満の顔をしたが、小吉が黙らせた。

「卑しい生まれであろうと関係ない。今の世の中は才覚次第だ。才覚があれば人の上に立つことはできる。俺にはそれがある。そして弥平はそんな俺の為にいろいろ立ち働いてくれた。これからも弥平は俺の右腕だ。弥平の言葉はおれの言葉だと思え」

身を震わせ、弥平が感涙する。

「ありがとうございます。小吉様のため、これからも働かせていただきます」

涙をすする弥平に小吉は微笑みかけた。これで自分と並び立とうとは考えないだろう。

「頼むぞ、弥平。しかしなあ……小吉様というのはどうもしっくりしないな。おれも苗字がほしい。武士団の頭領となったのだから、それに相応しい名前が……」

思案する小吉に武士団の一人が声を掛けた。

「生まれた地名を姓にするのはどうですか？」

さらにもう一人が興味深そうに訊く。

「お屋形様はどちらの生まれで？」

「俺は……」

知られたところでどうということはないのだが、小吉は故郷の村の名を出したくなかった。厭な思い出しかない。そんな村の名前を姓にしようとは思わなかった。

「黒谷村だ」

とっさに思い浮かんだのは、小吉を救ってくれた峰吉やお初が暮らしている村だった。

「黒谷村……ずいぶん遠くから来られたんですね」

小吉はうなづいた。自分でも遠くへきたと思う。蛙公卿に操られるまま来てしまった。それは自分が望んだことだ。お陰でこうして武士団を結成するまでになれた。藤堂を斃せば殿の直参になれるだろう。蛙公卿には感謝している。感謝しているが――操られるままでいいのだろうか。

「黒谷……小吉、まだしっくりこないな、どこか弱々しい。この際だから小吉も変えてしまおう。小吉、小吉……ううむ」

小吉は目を閉じ、腕を組んで考えた。が、適当な名前が浮かばない。

武士団の一人がぼんと手を叩いた。

「吉の字は残して、吉綱というのはどうでしょう」

「吉綱？」

目を開け、小吉は疑問の声を漏らした。

「ええ。酒吞童子を退治した源頼光の四天王の一人、渡辺綱にあやかっただけです。お屋形様も鬼を退治されました。綱の字こそお屋形様に相応しいと思いますが……」

「黒谷吉綱……」

立派な名前だと小吉は思った。これでまた一歩、本物の侍に近づけた――そんな気がした。

相変わらず蛙公卿は戻ってこなかった。いつまでも鬼の首をそのままにしておくわけにはいかず、小吉は藤堂の屋敷へ行くことを決めた。鬼と化した山賊の頭目、勘輔の首を手土産に家臣に取り立ててもらい、蛙公卿が云うように、もしも藤堂が鬼であれば斬り捨て、自分がその地位に取って代わるつもりでいた。

家臣団を引き連れ、小吉は藤堂の屋敷の門をくぐった。白昼の青い空の下、緊張が高まる。これまでは蛙公卿が何もかもやってくれていたが、蛙公卿がいなくとも、自分で何とかできると思っていた。小吉は腰の刀をしっかりとその手に握った。

対面のために小吉は奥座敷に通された。弥平を含め、家臣団は前庭に留め置かれている。一人で乗り込んだ小吉は、さすがに心細さが込み上げてきた。蛙公卿もいなければ弥平もいない。孤独に息が詰まりそうだ。やはり蛙公卿が戻ってくるのを待っているべきだったのか――。

小吉は奥座敷に一人きりだった。

襖が開けられ、いきなり斬りかかれる――そんなことがないともいえない、と考えていると、つつと襖が開いた。小吉は身構えた。脇の刀に手をかける。

「待たせたな」

小姓を一人連れて現れたのは、鬼のような顔をした大男だった。上座にどっかと腰を下ろす。その威風堂々たるさまに、小吉は威圧された。

「黒谷吉綱と申します」

「うむ。山賊の頭目、勘輔を退治したそうだな」

「はい。勘輔は鬼でした。幸運にも退治できましたので、その首を持参しました」

首はすでに藤堂の家臣に渡してある。

誇らしく小吉は云ったが、藤堂はそれほど喜んではくれなかった。哀しそうでもある。褒めてくれると思っていたのに、そんな素振りはまるでなかった。鬼の仲間だからか。勘輔が藤堂を攻めようとしなかったのは、同類だからか。小吉はそんなことをふと思った。

「勘輔は哀れなやつだった」

ぽつりと藤堂が漏らす。その声には苦悩の響きがあった。目に慈愛が満ちている。

同類を殺され、藤堂は憐れんでいるのか。

「それはどういうことで？」

藤堂がふっとため息を漏らし、小吉の刀を凝視する。

「お主もそうだ。蛙公卿に操られ、末路は哀れなものになるだろう」

藤堂も蛙公卿を知っていた。乱暴者の牛松、里長の善衛門、山賊の勘輔、蛙公卿に関った者はみな鬼となって死んだ。ならば藤堂も鬼となって死ぬのだろう。そして――

「わたしも死ぬということですか？」と、小吉は訊いた。

ためらった後、藤堂がゆっくりとうなづいた。

「蛙公卿は、操っていた者が役に立たなくなったり、あるいは裏切ったりしたら、鬼の姿に変えて殺しにかかる。殺しに来るのは新たに蛙公卿に操られた者だ。蛙公卿に才覚があるなどおだてられ、その気にさせられ、欲得をあおられ――そいつは自分を見失っている」

己の顔が赤くなるのを小吉は意識した。

「そう恥ずかしがるな。儂もそうだった。お前なら天下も獲れるなどおだてられ、蛙公卿に操られるまま多くの鬼を斬った。気づいていると思うが……お主が斬ったのは人だ、鬼ではない。蛙公卿が鬼の姿に変えたのだ。鬼であれば罪悪感はない。むしろ人の役に立てた気さえしてくる。英雄になった気になり、己の分をわきまえなくなってしまう……」

牛松を殺したとき――恍惚感に浸ったのを小吉は思い出した。自分が強くなった気がし、これから未来が拓けてくると思ったものだ。

藤堂が話を続ける。

「何故、蛙公卿は欲得をあおるのか……。それは蛙公卿が人の欲得を喰らうからだ。鬼の身体から黒い煙のようなものが出てきただろう、あれがそうだ。人の欲得を大きく育てるために、蛙公卿は次から次へとうまい話を云ってくる。それに乗せられ、操られている者は欲得を大きくする。大きくなった欲得を喰らうために、蛙公卿は新たな操り者を差し向ける」

自分の役目が蛙公卿のために欲得を刈りとることだったとは――小吉は憤りを感じた。

誰でもよかったのだ。欲に目がくらみ、騙されやすいやつなら誰でもよかったのだ。

しかし、心の奥底はまだ揺れていた。

眼前の藤堂が騙しにかかっているとも考えられる。蛙公卿は藤堂を殺すつもりでいる。殺されないために、自分と蛙公卿を離反させようとしているのではないか。

「僕は蛙公卿のために立ち働いた。何人もの鬼を斬り殺した、お主が持っているその刀で。天下を獲れるとおだてられ、殿にまで敵意を向けようとした。その頃、僕はまだ殿の家臣ではなかった。山を根城にした土豪。勘輔のような山賊ではなかったが、似たような野武士の集団だった。ある日、殿が鷹狩りに遠出されたところを襲う――そういう企みが図られた。もちろん蛙公卿の命だ。殿は野にぽつりと建つ寺に投宿されていた。冷え冷えとした月明かりの中、僕は自分の武士団を率いて野を駆けていった。殿を亡き者にし、自分が取って代わる――その野望に心は満ちていた。寺に着き、もうすぐこの国の頂点に立てると思った。蛙公卿の術のなせる業なのか、警護の兵士は眠りこけていた。僕は殿の寝所に踏み込もうとした。すると、家臣の一人が僕の行く手をさえぎった、手に蛙公卿の刀を握り締めて。はじめは訳が分からなかったが、次第に自分の身に何が起きるのか、予想できた。何度も見た光景だったからな。今度は自分が鬼の姿に変えられ、家臣に斬り殺される、そう悟った。蛙公卿に騙されていたのを知った。もう逃れられない。僕は観念した。僕の欲得は相当に大きくなっていったことだろう。家臣に斬られ、身体から立ち上る黒い煙を蛙公卿が美味そうに喰らう光景が目に見えた。だが、そうはならなかった。奇跡が起きたのだ。外の騒ぎが聞こえたのだろう、殿がお出ましになった。そして蛙公卿を叱責させたのだ。また悪さをしているのか、と。いたずらを見つけた子供のように、蛙公卿はすごすごと引き下がった。警護の兵が目を覚まし、僕を狙った家臣は斬られた。そこで殿から僕は蛙公卿のことを諄々と聞かされた」

「殿と蛙公卿のえにしですね」

「そうだ。何か知っているのか？」と、藤堂が興味深そうに訊く。

「知っているといっても、殿が天子様につながる身だということだけです。蛙公卿はその尊い血筋を護っているのではないかと推察しておりますが……」

「うむ。そのとおりだ。しかし、違う部分もある。確かに、蛙公卿は殿を護るために、殿に弓引く者を殺してきた。昔は忠義心に満ちていたが、今は違う。今は……己の腹を満たすためにやっている、それだけのことだ。だからこの国では小さな諍いが絶えない。この頃では他国にまで出向き、あちらこちらで蛙公卿は操り者を増やし、その欲得を刈り取っている」

「そもそも、蛙公卿は何処から来たのです？ 殿とのいきさつは？」と小吉は訊いた。何故蛙公卿は殿を護っているのだろうか。どういった因縁があるのだろうか。

藤堂が親密な微笑みを返す。

「儂も殿に訊いてみた。殿の話では、いきさつは平安の世にまでさかのぼるらしい。蛙公卿は都で飢え死に寸前だった。貴族であった酔狂な殿のご先祖に拾われ、飼われていたが、ご先祖はこの国の国司として赴任なされた際、都にお忘れになってしまった。寵愛が恋しくて、蛙公卿はご先祖の後を追った。その執念で化け物と変化した蛙公卿はこの国にたどり着き、手前勝手に、ご先祖の血筋を護ることに自分の存在意義を見出した。そして……今は人をおだてては膨らんだ欲得を喰らっている。儂が蛙公卿に食われなかったのは、ひとえに殿のお陰だ。蛙公卿の所業に心を痛められていた殿は、すんでのところまで助けてくださり、殺しにきた儂を家臣の一人に加えてくださった。家臣になれば蛙公卿も、もう手を出さないとされたのだろう。儂は感謝し、殿に忠誠を誓った。私心を捨て、欲得をなくし、殿に仕えた。だが、儂が改心したのも知らず、蛙公卿は新たな操り者を差し向けた。それが山賊の勘輔だった。勘輔は一度、ここを襲ったことがあった。だが、儂が鬼に変化しなかったためにしくじり、それからは己の砦にこもり、悪行にいそしむようになった。蛙公卿に騙されていたのを悟ったのだろうか。蛙公卿に操られた可哀相なやつだが、悪人は悪人、民のために儂は勘輔を殺さねばならなかった」

藤堂がふっと苦笑いを浮かべる。

「まあ、砦があまりに堅牢で、果たされなかったが……」

その勘輔を斬ったのは自分だ。民のためという意識はなかった。自分のため、その首を手土産に、出世を図ろうとしていた。

次は自分の番だ。蛙公卿の操り者がやってくる。死にたくはない。どうすれば――

「後生です。わたしを家来にしてください」

床に額をこすりつけ、小吉は願い出た。

藤堂しかいない。鬼に変化しない藤堂以外に自分を護ってくれる者はいない、と思った。

「それはかまわん。だが……」

だが――なんだというのだ。小吉は藤堂の言葉を待った。

「お主に私心を捨てられるか？ 欲得をなくすことができるか？」

藤堂の家臣になればれっきとした侍になることができる。しかし、それは同時に小吉の欲得の達成でもあった。ずっと侍になりたいと希求してきた。叶ったも同然。だが、欲得を捨てなければ鬼に変化させられ、蛙公卿に食われてしまう――そのときは近いだろう、達観できそうにない

。

返答ができず、小吉は藤堂の屋敷を辞した。

苦悩する小吉に、弥平やほかの家来が問い詰める。

「何があったのです？」

「家臣に取り立ててもらえたのですか？」

小吉は何も答えなかった。ただ黙って、歩く道の行き先を目をやっていった。

蛙公卿を滅ぼす方策が何かないだろうか、と思索する。が、すぐに無駄だと見限った。

古より生きていた悪鬼、そんなものがあるならとっくの昔に誰かがやっているだろう。あの化け物を滅ぼす方策があるはずがない。あるとすれば、誰もが蛙公卿の話に耳を貸さなければ蛙公卿は滅びるかもしれないが、それは望むべくもない。ならばどうするか。藤堂を頼るしかない。小吉の心の奥底にあった藤堂への疑念はすっかり払拭されていた。今は揺るぎない信頼に満ちている。私心を捨て、藤堂の家臣になりたい。しかし――それは蛙公卿を裏切ることになる。

里長だった善衛門の屋敷に帰り着き、小吉は家臣団を前に重い口を開いた。

「家臣にしてもかまわないと藤堂様はおっしゃった」

おお、と歓声上がる。

「これで我らは侍になれる」

「思う存分戦って出世するぞ」

各々のあげる喜びの声を小吉は制した。

「俺は……やめようと思う」

辺りは水を打ったように静まり返り、そしてざわついた。

「やめる？ どうして？」

「鬼の首では不足だとでも？」

「いや、藤堂様は鬼の首を自分の手柄にしたいのではないか。横取りするつもりだ」

「おそらくそうだ。あのお方ならやりかねない」

藤堂の過去を知っているのだろう、家来の一人が苦々しげに云う。

「そうではない」と、一人ひとりを見やり、小吉は云った。

「ならば何故？」

小吉は大きく息を吐いた。

「俺は命が惜しい」

目を宙に転じる。慙愧に耐えなかった。侍を目指していたものの口にする言葉ではない。

「命が惜しい？」

「これはしたり」

「臆病風に吹かれたか」

もはや小吉は武士団の頭領ではなかった。みなが軽蔑の目を向け、罵倒の言葉を浴びせる。

「あとはお前たちの好きにしろ」と云い残し、小吉はみなから離れた。

善衛門の屋敷を出る。

行くあてを考える。

答えはひとつしかなかった。峰助の村、黒谷村へ行こうと小吉は思った。あそこなら自分の中に渦巻いていた欲得を浄化してくれそうな気がした。

近くの寺で仮眠し、陽が出る前に小吉は歩き始めた。黒谷村は遠い。今から歩いても日暮前に着けるかどうか。そしてどうやら裏切りが蛙公卿に知れたようだ、寝ている間に蛙公卿の刀がなくなっていた。残っているのは小刀だけ。

蛙公卿は何処にいるのだろう。勘輔を斬って以来見かけていないが。おそらく遠くにいて、その地でまた諍いの種をまき、刈り取っているのだろう。長い舌で黒い煙を喰らっていることだろう。

小吉は急いだ。陽が次第に高くなり、小吉を真上から照らす。

やがて翳り始め、影が長くなる。

小吉は空腹を覚えた。蛙公卿と出会ったときも腹が減っていたのを小吉は思い出した。

厭な予感がする。

もうすぐ黒谷村に着くだろうが、その前にあの森の近くを通らねばならない。あそこで蛙公卿は待っているのではないか。新たな操り者を引き連れ、今か今かと首を長くしているのではないか。

あたりの気配を探りながら小吉は足を急がせた。何も変わったことはない。湿った風も吹いていない。空腹を刺激する匂いもない。ただ、静かに陽が落ちているだけ。森は静寂に包まれていた。ここに蛙公卿はいないようだ。何事もなく通れるだろう。

小吉は黒谷村を目指し、意気込んで歩いた。黒谷村に着けば助かる――そう願った。

と、馬の駆ける音が後方から聞こえてきた。振り返ると、土埃を上げて一頭の馬が早掛けでやってくるのが見えた。誰が乗っているのかは分からなかったが、それが新たな操り者であるのは分かった。馬の傍らの宙をぼんやりとした明かりが飛んでいる。蛙公卿だ。こんなにも早く蛙公卿に捜し出されるとは思ってもいなかった。とっくに見限られていたのだろうか。小吉は驚き、恐怖を抱いた。そして悔やまれた。もう少しで黒谷村に着けるのに――。

馬がさらに近づくと、誰が乗り手であったのかが分かった。蛙公卿の新たな操り者は弥平だった。そうかもしれないと見当していたが、こうして対峙すると弥平が哀れに思えてならなかった。

「臆病者め。侍になれるせっかくの好機だったのに」

馬上から弥平が罵る。

「偉そうにほざくな。馬から下りろ」

「ああ、下りるとも。下りなければ刀を上手く操れないからな」

馬から下り、弥平が刀に手をかける。もちろんそれは蛙公卿の刀だった。

あれで斬られる。

鬼に変化させられ、殺される。

小吉は覚悟した。

もう避けられない。捨てようと思っても、その心内に侍への憧憬がまだ残っている。黒谷村で暮らしたとしても、百姓になりきれなのか。なりきれないだろう。いつの日か、またぞろ侍になりたいと願うに違いない。

「まさかあんたまでが鬼だったとはな。その首を持って殿に直接訴えてやることにした。いいかよく聞け。勘輔の首を獲ったもの俺だし、その首は藤堂に馬鹿な小吉が騙し取られた、奸臣の藤堂をわたしに成敗させてください、と願い出るのだ。殿は藤堂の邪心に気づいておられない。俺は藤堂を成敗し、殿の直参となるのだ」

弥平は蛙公卿をすっかり信じきっていた。ほんの少し前の自分を見ているようで、小吉は哀しくて堪らなかった。蛙公卿に翻弄され、喰われるだけの運命――

「次はお前だぞ」

心痛を込め、小吉は諭すように云った。

「なに？ 訳の分からないことを……」

弥平には通じなかった。通じたところで弥平の運命は変わらないだろうが。

小吉は蛙公卿を睨みつけると、急いで背を向け、地面にひざまずいた。

「鬼め、姿を現せ！」

辺りに弥平の声が響き渡る。

小吉の身体は――鬼に変化しなかった。

「どうなっている？ 小吉は鬼ではなかったのか？」

不審の目を向け、弥平は蛙公卿に詰め寄った。

「儂にも分からぬ。とにかく小吉の身体を調べてみる。生きているのか？」

弥平が小吉の前に回ると、前のめりになった小吉の身体から血が溢れていた。

「これは……」と、弥平は驚きの声をあげた。

小吉は腹を切っていた。鬼と変化する前に、黒谷吉綱として、真似事ではあっても侍としての矜持を持って死ぬために。

小吉の腹には、勘輔の首を切り落とした小刀が残されていた。

「小吉は腹を切った。どうしてだ？ 話が違うではないか」

「儂にも分からぬと云っているだろう。不測の事態が起きたとしか云えない」

「よく分からんが、仕方がない。では……これから俺はどうすればいいんだ？」と弥平が訊く。

「とにかく、小吉の死体を始末しろ。それから善衛門の屋敷に帰っておれ」

命ぜられるまま、弥平は小吉の死体を街道脇の深い草むらに引きずっていった。それが済むと馬にまたがり、街道を取って返した。

馬の駆ける音が遠のく。

蛙公卿は森の中に身を潜めた。

じっと待っていた、腹を空かせた誰かが通るのを。

了